

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	薬学教育における在宅医療に関する教育実践
演者名	串田一樹 1) 廣原正宜 2)
所属	昭和薬科大学医薬情報評価教育串田研究室 昭和薬科大学薬剤師実務教育廣原研究室

目的：平成 18 年度入学生から薬学教育が 6 年制になり、薬学教育モデル・コアカリキュラム(以下、コアカリ)によって信頼される薬剤師、良質な薬学研究者を養成することになった。コアカリは全国共通の到達目標になっているが、特色のある教育は各大学に任されている。本学では、薬剤師養成の視点から、高齢・多死社会の到来に向けた医療の在り方、地域包括ケアにおける薬局機能などを模索するとともに、このような社会に必要な人材を養成するために在宅医療という視点からカリキュラムを配置して教育実践をしたので報告する。

実践内容：コアカリは、生命にかかわる職業人としてのヒューマンリズムの育成を求めていることから、学年横断的に生命観、医療の担い手としてのこころ構えを育みながら、3、4 年次に地域医療全般について、5 年次実務実習、6 年次実務実習として在宅緩和ケアの同行研修までをカリキュラムとして配置した。また、卒業研究として在宅医療に関するテーマを設定し、3 ヶ月間の訪問同行を通して在宅医療の臨床現場から患者の意思、薬の役割、患者の生活全般のほか、他職種との関わりを学ぶ機会とした。さらに、カリキュラムにはないが、地域活動として福祉フェアの支援、認知症の患者会との交流などを実践している。

実践効果：大学周辺地域は高齢化率 30%を超える地域であり、福祉フェアや患者会との交流は、地域住民とコミュニケーションをとる機会となり、学生が自分の存在を認識する機会となった。また、6 年次の訪問同行は、先週訪問した患者さんが今週は訪問しない現実と直面し、「患者の死」に接する機会となり、地域医療について、また薬剤師の役割について医療現場から学ぶことができた。

考察：地域医療は生活者の視点が問われていることから、治療だけではなく、生活を通して患者や家族を支える視点が大変重要であることを学生が認識する機会となったことは、教育実践のうえから大変意義のあることであった。